



## 北海道の漆製品

上屋 真一（恵庭市教育委員会）

北海道における縄文時代の漆製品出土遺跡数は50遺跡を超える。時期別には縄文時代早期の函館市垣の島B遺跡から出土した装身具が最も古い。その後、前期に帶・紐状漆製品が道央と道東から出土し、後期中葉になると装身具としての漆塗り櫛が道央部にやや多く出土するようになる。小樽市忍路土場遺跡の低湿地部分から漆塗りの結歯式櫛が出土しているが、それに伴う赤い漆塗りの糸玉、漆液の入った土器などがあることから、北海道における漆製品生産を示すほぼ確実な資料と考えられる。

後期後葉には、恵庭市柏木B遺跡や千歳市キウスなどの周堤墓（環状土籬）から副葬品として漆製品が出土するようになり、漆塗りの弓を副葬するという特徴がみられる。

後期末葉になると、石狩から日高地方を中心に漆製品が多く出土するようになる。道央・道南部から遠く離れる道東の根室市や斜里町に漆塗り櫛の分布があるが、地域的な伝播、流通の問題を含んでいる。この時期には石狩低地帯南部の恵庭市内に存在するカリンバ遺跡、西島松5遺跡、柏木B遺跡第2地点などから漆塗りの装身具が多量出土する。これまでに総計200点以上が見つかっており、なかでも漆塗り櫛は北海道の半数以上を占めている。出土状況は、土坑墓から検出されるものが多く、その場合、遺体に装着した状態の副葬品として出土する傾向がある。出土状態から装身具の使用方法の推定もある程度可能で、内容も明らかになりつつある。

晩期は、櫛、腕輪、藍胎漆器、垂飾などが出土しているが、量的には少なく、後半期には見られなくなる。

ここでカリンバ遺跡の漆製品について少し紹介してみたい。カリンバ遺跡からは後期末の土坑墓が多数調査されているが、そのうち4基が複数の遺体を埋葬した合葬墓で、漆製品の大半はこの4基から検出されたものである。漆製品の総数120点を超える。器種構成は、櫛、髪飾り輪、額飾り輪、耳飾り輪、髪飾り紐（リボン）、胸飾り、腕輪、腰飾り帶などの装身具類である。これに糸魚川・青梅産の翡翠をはじめ、橄欖岩、滑石、琥珀などの石製、土製の玉と勾玉がある。翡翠やサメの歯などは交易で手に入れた可能性の高いものである。単葬墓からは櫛、腕輪、玉類が少量出土するだけで、副葬品の量に明らかな違いがある。単葬墓と合葬墓にみられる副葬品の質・量の違いは、縄文後期における階層社会を考える際の根拠になるものである。

漆製品のうち、腕輪には形態的に多様なものがみられ、環状の輪に付加して、隆起線、膨らみ、突起、ブリッジなどをつけたもの、漆で模様をつけたものがある。胎は、植物質の皮か茎で芯を作り、その上を撚糸や草皮で縦巻きにしたもの、動物の皮を素材にした可能性のあるものなど多様である。これらはカリンバ遺跡タイプの腕輪と呼べそうな特色をもち、色についても赤、朱、赤桃色などの彩色が施されている（図1）。櫛は、腕輪と同じように漆の塗り重ねが認められ、表層に各色の朱塗りが施されている。透かし文様の櫛と透かしのない櫛がほぼ同数みられ、透かし文様のある櫛には5通りの基本的な文様パターンが存在している（図2）。

カリンバ遺跡からは低地面の包含層中に赤い顔料が付着した石皿や、顔料そのものの層が含まれております、漆製品製作の間接的な証拠と考えられる。大量の漆塗り装身具の出土は、縄文時代後期末の装身具生産地と流通の問題を含んでいる。

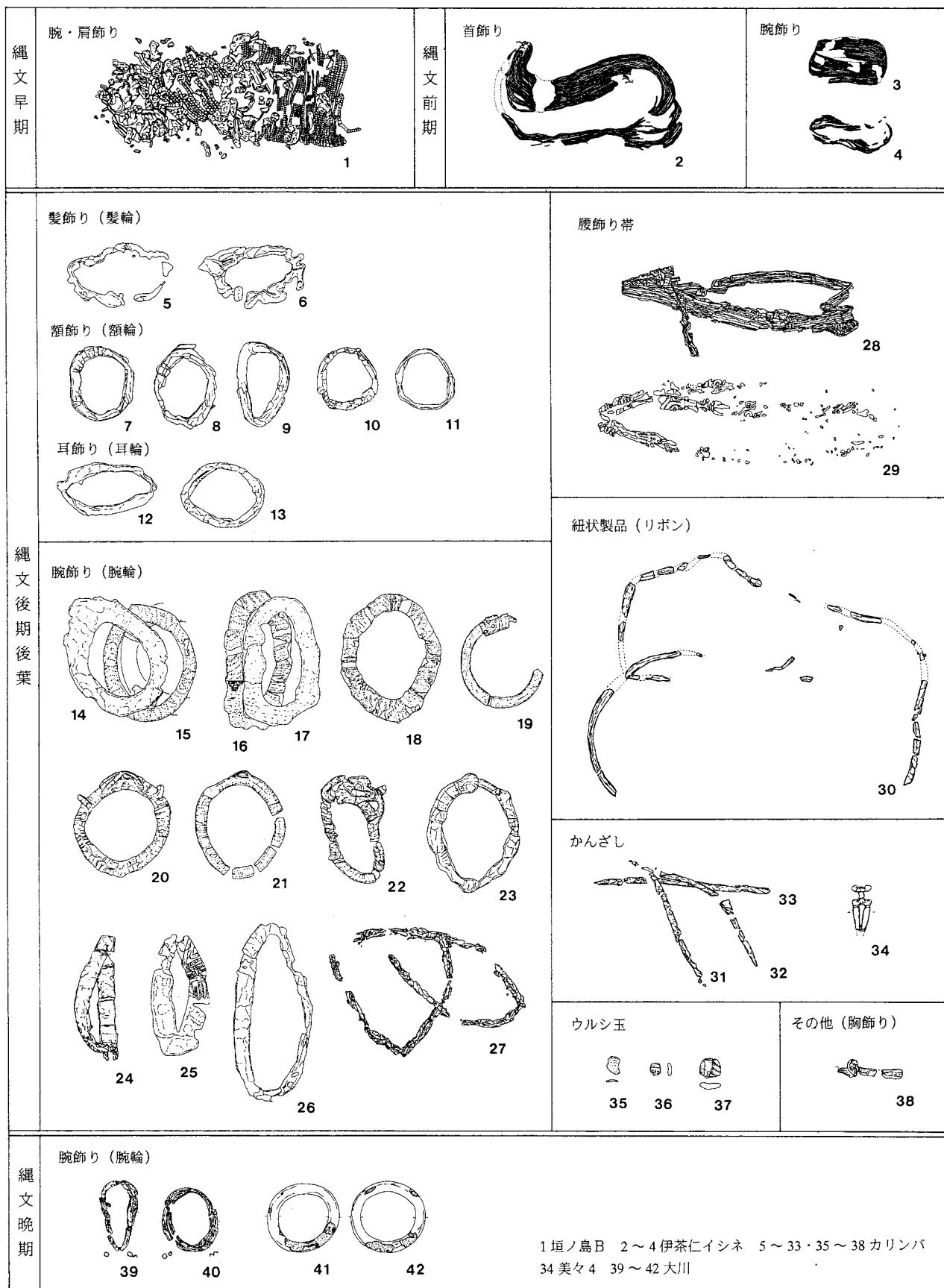


図1 北海道出土のおもな漆塗り装身具（櫛以外）

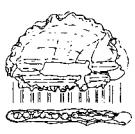
縄文後期中葉	1	2											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
縄文後期後葉	A												B
	1	2	3	4	5			1	2				
	a 14	a 23	a 27	a 31		33		a 34					
	15	24	28					35					
	16	25	29					36					
	17							37					
	18							38					
	19							39					
	20							40					
	b 21	b 26	b 30	b 32				b 41					
縄文晚期	 1 野田生 1 2 ~ 12 忍路土場 13 安芸 14 ~ 19・21 ~ 24・27・28・30・32 ~ 43 カリンバ 20・25 柏木B 26・31 御殿山 29 美々4 44 柏原5 44												

図2 北海道の結歯式漆塗り櫛